

平成21年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 授業改善に努め、「わかる授業」、「考える授業」を実践し、学力の向上を図る。	① 習熟度別・少人数授業を効果的に実施し充実させる。	習熟度別・少人数授業の実施により、よく分かった、意欲がわいたとする生徒が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 <div style="text-align: right;"> 理解度 84% 意欲 72% </div>	B	<ul style="list-style-type: none"> 習熟度別授業を実施している生徒へのアンケート結果では、理解度は84%（数学78%、英語90%）と効果が表れている。 意欲は72%（数学69%、英語75%）である。 1年で習熟度別授業で学んだ生徒は、2年3年の一斉授業では効果が薄くなる傾向にあるので、次年度は習熟度別授業の効果的な展開、より意欲の高まる教材の研究が必要である。
	② 生徒による授業評価を活用し、授業改善に役立てる。	授業評価の基準で総合評価が「非常に良好」と「良好」である教諭の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 <div style="text-align: right;"> 68.1% 7月 70.2% 1月 66.0% </div>	C	<ul style="list-style-type: none"> 生徒による授業評価の基準である「授業力指数」の平均は第1回53.9点、第2回55.0点で全体では評価が向上した。 総合評価が下がった者が若干いたため、割合を下げる結果となった。 (70.2%→66.0%) 授業改善への意識が向上し、評価結果を真摯に受け止める前向きな姿勢が教師に生まれており、改善を加えながら現在の評価方法を今後も継続する。
	③ 学習習慣の定着を図る。	各クラスの平均家庭学習時間が、1・2年生で2時間以上、3年生で3時間以上確保している生徒が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満 <div style="text-align: right;"> 69.0% (4回平均) </div>	A	<ul style="list-style-type: none"> 調査が定期考査前であるため、数値は高めになっている。 しかし、第1回55.1%、第2回70.6%、第3回69.2%、第4回81.3%で、生徒の学習時間は増加しつつある。 予習の徹底を指導し、週末課題を提示するなどの現在の方策を継続することとする。 考査期間から離れた時期における調査も検討する。
	④ 思考力・表現力の育成のため、3年間を通した小論文指導を行う。	小論文テストの判定が標準以上の生徒が、 A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	B	<ul style="list-style-type: none"> 小論文模試の全国平均以上の生徒は3年74%、2年74%、1年59%、3学年平均68%で、学年を重ねる度に効果は上がってきている。 生徒には毎回必ず真剣に取り組むように指導を続けており、次年度も継続したい。
	⑤ 授業において情報機器を効果的に活用する。	授業で情報機器を A 月1回程度使用した B 学期に1回程度使用した C 年に1回程度使用した D 情報機器を使用しなかった （※情報機器に視聴覚機器も含む）	C (2.4)	<ul style="list-style-type: none"> 例年と同程度の数値である。 情報機器の利用者は増えつつあるが、全く使用していない者もいる。 次年度は1人1台パソコンとなるので、利用者増を図りたい。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し、平均が1.5未満なら改善策検討】
学校関係者評価委員会の評価	①「生徒による授業評価」の評価に客観性を持たせるためには生徒が答えやすい質問項目にする必要がある。 ②生徒による評価は授業の改善のために行うものであるから、評価を高くするために生徒に合わせすぎはいけない。学力向上のためには、厳しい指導や生徒に難しさを感じさせる授業も必要である。 ③習熟度別授業については、可能性があれば2・3年生にも拡大して学力向上を図る必要がある。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	①生徒による授業評価を授業改善のための資料として有効に活用するため、次年度においては各教科において評価項目の見直しを行うこととする。 ②授業の水準を下げず、生徒の学力の向上を図るという姿勢は堅持する。 ③「学力向上実践モデル事業」の2年目あたる次年度は、習熟度別授業を2年生の理科と数学に拡大する検討を行っている。			

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 生徒一人ひとりの個性にあった進路設計をうながし、生徒の進路実現率を高める。	① 定期的な進路情報の提供に努め、進路ガイダンスを充実させる。	適切な進路ガイダンスが実施できる A よくあてはまる A : 37.5% B 概ねあてはまる B : 56.3% C あまりあてはまらない C : 6.2% D 全くあてはまらない 昨年数値 2. 5	B (3.3)	<ul style="list-style-type: none"> 1、2年では学習状況調査の説明会により生徒の学力、学習習慣についての研修を行い、また進路検討会を2年では8月に、3年では7月と12月に実施して、担任のより適切な進路指導を支援した。 次年度は進路検討会を各学年で実施し、副担任も加えることによりさらに内容の充実を図りたい。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.5未満なら改善策検討】
		自分の進路について A 真剣に考え、進路設計に取り組むことができた A : 34.7% B 概ね真剣に考えることができ、進路設計に取り組もうとした B : 59.0% C あまり真剣に考えることができなかった C : 5.7% D 真剣に考えることができなかった D : 0.6%	B (3.3)	<ul style="list-style-type: none"> 進路行事で「教育実習生の話」、「大学に合格した卒業生の話」の新設や「大学説明会」での講師の選定の工夫等により生徒の進路意識が高まり、昨年度数値2.7からさらに向上した。 今後も行事の内容の改善や工夫により生徒の意識向上を図りたい。 達成度判断基準は、次年度も同様とする。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.5未満なら改善策検討】
		生徒に対する進路指導が A 適切である A 14.6% B 概ね適切である B 57.2% C あまり適切でない C 23.3% D 適切でない D 4.9%	B (2.8)	<ul style="list-style-type: none"> 判定基準を越えており、保護者からの一定の信頼は得られている。 その一方で無回答の保護者が2割程度いるのは、進路情報が十分伝わっていないためと考えられる。生徒から保護者に確実に「進路だより」が伝わる方策と進路情報の提供のあり方等を検討したい。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.0未満なら改善策検討】
	② 生徒の進路目標の実現率を高める。	生徒の第1志望の実現率が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満 61. 1%	A	<ul style="list-style-type: none"> 判定基準のAを達成できたが、国公立大学を第1希望にしている生徒の多い理コース・文IIコースの実現率は50%程度で芳しくなかった。これらのコースでは、目標を目指して学習に励んだが、合格に達しなかった生徒が多かった。 次年度は早期に第1目標を決定させ、習熟度授業や補習等で十分な学力を身につけさせることにより実現率をさらに高めたい。 次年度は基準値を上げ、A80%以上、B70%以上、C60%以上、D60%未満としたい。
	③ 国公立大学への志望者数を増やし、合格者数を増やす。	全学年で土曜補習や夏季補習に満足している生徒の割合が A 95%以上 土曜補習 71% B 90%以上 1年76% 2年60% 3年78% C 80%以上 夏季補習 68% D 80%未満 1年66% 2年64% 3年75%	D	<ul style="list-style-type: none"> 集計結果は厳しいものになった。不満足の原因として「授業と変わらない」「休みなので勉強する気にならない」等の意見があった。 次年度は実施内容の計画を予め生徒に提示し、1日完結ものを扱う等の工夫をおこなうことで生徒の意欲や満足感を高めたい。 今年度の達成度判断基準は現状に合わないため、次年度は基準を設定し直した上で達成度を上げることを目指したい。
		センター試験の得点の平均点偏差値50以上の生徒が A 20人以上 B 15人以上 15人 C 10人以上 昨年 16人 D 10人未満	B	<ul style="list-style-type: none"> 文系生徒が振るわなかったものの、全体では昨年度の水準を維持している。（今年度102人中15人、昨年度109人中16人） 平均点偏差値においても、過去2年間より上昇しており、特に国語、数学、英語で2ポイント近くの上昇があった。 習熟度別授業の成果を踏まえ、今後も学力向上の対策を継続する。
		国公立大学合格者数が A 60人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満 48人	C	<ul style="list-style-type: none"> 集計結果はCであったが、1クラス減になった学年にもかかわらず昨年度に比べ3人増の合格者を出すことができた。また、富山大学に20人の合格者を出すこともできた。 これらの成果は、2次試験対策の補習を組織的・継続的に取り組んだ結果と考えられる。 次年度はさらに補習の内容を充実させ合格者数を増やしていきたい。

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 生徒一人ひとりの個性にあった進路設計をうながし、生徒の進路実現率を高める。	④ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	面談実施率が A 70%以上 B 50%以上 C 30%以上 D 30%未満	A	<ul style="list-style-type: none"> 問題を抱えた生徒の面接実施率において目標を達成しており、面接に当たって半数の担任がQ-Uを参考資料として活用していた。 不満足群に属する生徒や非承認群・侵害行為認知群等、問題を抱えた生徒が多く潜在していると考えられる。 Q-Uを参考にしたクラスでは問題を抱えている生徒への気づきの割合が高いが、参考にしなかったクラスでは気づきの割合が低い。 早期に生徒の問題に気づくため、Q-Uの使用について次年度も継続し広める必要がある。
		いじめが A ない B 1件あった（ある） C 2件あった（ある） D 3件以上あった（ある）		
学校関係者評価委員会の評価	<p>①実際に参観したところ、生徒は土曜補習に対して真面目に取り組んでいるし、教員にも熱心が感じられる。習熟度別の指導を導入するなどの工夫を加え、生徒の満足度をより高め、学力向上に有効な補習とする必要がある。</p> <p>②明倫高校を卒業したことにプライドが持てる生徒を育てるためには厳しい指導も大切である。生活指導を充実させ、しっかりとした生徒を育てる必要がある。</p>			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<p>①補習については、学習内容を事前に生徒に知らせ、予習等を通じて生徒が意欲的に取り組めるように、実施方法を改善する予定である。</p> <p>②現在の生徒指導は保護者から理解を得ている。学力向上の土台をなす健全な生活態度を育成するため、強い指導を堅持する。</p>			
3 生徒の自主的な活動を支援し、自律心を高めるとともに、たくましい人間の育成に努める。	① 体育授業時に運動量を確保し、体力の向上を図る	新体カテスト（シャトルラン）で、1回目よりも向上した生徒が A 75%以上 1年 59% B 50%以上 2年 59% C 25%以上 3年 54% D 25%未満 <u>総合 57%</u>	B	<ul style="list-style-type: none"> 男女で伸びの差が大きかった。また、部活動引退後の3年生の伸び率が低下していた。 12月の測定時は、新人大会が終了していたこと、期末考査終了直後であったこと、新型インフルエンザの流行等で体調を崩した生徒が多かったこと等から、生徒の意識・意欲の低下したものと思われる。 次年度は、2回目の測定時期を見直すこととする。
	② 部活動の加入をうながし、学校全体の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上 1年 97.9% B 80%以上 2年 84.5% C 70%以上 3年 62.4% D 70%未満 <u>平均 81.6%</u>		
	③ ボランティア活動への自発的な参加を促す。	生徒がボランティアに関連のある活動に、 A 5回以上参加した A : 12% B 3回以上参加した B : 28% C 1回以上参加した C : 26% D 参加しなかった D : 34%	C (2.2)	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は生徒会執行部と部活動が中心となって、各種ボランティアに自発的に参加した。ボランティア講座等の成果で、3回以上参加した生徒が約40%に達した。 全く参加しなかった34%の生徒への啓発活動の継続が必要である。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.5未満なら改善策検討】
学校生活が A 非常に充実している B 充実している C あまり充実していない D 全く充実していない	B (3.4)	<ul style="list-style-type: none"> 「A」38%、「B」45%、「C」10%、「D」7%で、学校生活に対する生徒の満足度は高い。 「C」と「D」の生徒を少なくするためには、部活動だけでなく学習面の指導や相談室と連携した支援体制の充実が必要である。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.5未満なら改善策検討】 		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 生徒の自主的な活動を支援し、自律心を高めるとともに、たくましい人間の育成に努める。	④ 全員一斉清掃の徹底により美化意識を高める。	A 常に監督箇所に出向き十分に指導、点検している B 監督箇所に出向き点検しているが、生徒の指導は十分ではない C 時々、監督箇所に出向き点検している D 指導も点検も十分していない A:66.7% B:31.0% C:2.4% D:0%	A (3.6)	・職員の意識は向上しているが、学級数減による職員の減員があるため、同時監督が難しい複数箇所を1人で監督する職員が約4割あり、指導が行き届かない部分がある。 ・使用頻度の低い場所の日替わり掃除など提案していきたい。 【A4点、B3点、C2点、D1点で集計し平均が、2.5未満なら改善策検討】
	⑤ 危機管理意識を高め、事故の防止と発生時の対応に万全を期す。	危機管理に関する校内教職員研修・訓練を A 年間5回以上行う B 年間3～4回行う C 年間1～2回行う D 全く行わない 危機管理4回 特別支援3回 その他 2回	B	・実践的な防犯訓練や事例に基づく危機管理対応の演習によって、教職員の危機管理に対する意識と行動は緊急時に対応できる高いレベルにあり、心肺蘇生術によって実際に生徒を救うという成果につながった。 ・次年度も着実に研修・訓練を実施していくこととする。
	⑥ 生徒の読書を促進する。	全学年の生徒一人あたりの年平均貸出冊数が A 3.5冊以上 B 3.0冊以上 C 2.5冊以上 D 2.5冊未満 1人あたり貸出冊数 2.5(年平均)	C	・開館時間を延長したため、年平均貸出冊数は昨年度と比較して若干伸び、入館者数も伸びたが、目標には達していない。 ・来年度は、図書館利用促進と望ましい読書習慣の定着のため、全校または学年単位の一斉読書の活動を複数回実施する。また、広報活動として、図書使い、図書委員による図書掲示を毎月実施する。
	⑦ 保護者にPTA主催行事や学校行事に積極的に参加してもらう。	総会、学年別懇談会、公開授業、教育ウィークにおける保護者の延べ参加率が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満 参加者 510人 参加率 64.3% 昨年度 54.9%	A	・昨年度の481人54.9%の参加率と比べて、今年度は10%の参加増加であり、良い結果になった。 ・3年生保護者懇談会の内容刷新を図り、今年度は進学説明会とし、進路指導課・3年学年会の連携で開催したことが一つの要因と思われる。 ・次年度もさらに内容を工夫して開催し、一層の充実を図りたい。
		「朝の挨拶運動」における保護者の参加率が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満 参加数延べ433人 参加率 54.6% 昨年度 55.1%	B	・昨年度より0.5%参加率が下がった。 ・4月当初の参加申込数が571人(72.0%)で、多くの保護者が参加の意思をもっているが、活動が半年にわたるため、特に後半の参加者が激減し、参加率の減少につながっている。 ・次年度は、PTAの活動として保護者が主体的に取り組み、申込みをした保護者がもれなく実際に参加できる方策を検討する。
学校関係者評価委員会の評価	①危機管理に関する研修や「発達障害」に関する校内研修に取り組んでいるが、こうした研修は重要であるので、生徒の安心・安全の観点からも継続するのが望ましい。 ②読書指導に関しては、生徒の生活時間を考えると、「朝の読書」時間を設定するなどしないと、なかなか読書に時間を費やせないようである。また、小論文指導との関連を持たせることで生徒の関心を高め、読書につなげることも可能である。 ③ボランティアへの参加については、生徒に機会を与えること、活動対象の施設等に事前に協力を申し出ること、達成度の判断基準の見直し等、改善すべき点が多い。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	①危機管理に関する研修により、実際の場面で成果をあげているので、今後も研修体制を維持していく。 ②読書指導については、次年度以降新たな取り組みを行うことにより、目標達成に向けて指導を強化するとともに、小論文指導の観点からも図書課と進路指導課の連携を図ることとする。 ③ボランティア活動については、協力体制の関係機関・施設への周知を図り、活動の機会を生徒に与えるよう努めることとする。			